



本能寺  
 軍談  
 山崎大合戦  
 全

~13  
 4332



目録

一 明智光秀本姓支押ある事

一 内衆兼九折見の事

一 信長公弓場大軍を退く事

一 附安田能云清なる名の事

一 明智光俊二条の城へ押寄合戦の事

一 附若田去意と法師丸をよめる事

一 持宗宛来り事在中里和贈りたる事

一 附光秀斗異と云る事打撃んとする事

一 織田信澄明智方へ合戦の事

一 附丹羽長秀家来上向水信澄と対する事

一 羽染秀吉一掃がゆえ危難の事

一 附如着清正曰至天但馬ち成討する事

一 明石城を度人出り輝世城跡にて切腹の事

一 附中川遊走福徳市松口海の事

一 秀吉の秘智法巧威伏の事

一 附尾が橋へ来陣の事



目録

秀吉惣大将と頼朝は軍陣定の事

附山崎入志津ゆへの事

明智光秀八幡はちまん後出陣の事

附耳利みみきり八幡はちまん一番いちばん陰多かげた名なの事

母後内務助父子勇戦ゆうせん云云いんげん軍ぐんの事

附百指ももさしをを助すけ秀吉しうき死しををももるる事

丹羽にわ五郎ごろうはは忠ちゆう働たうきき頼朝たうのの級ぐい由ゆ法ぽうのの事

附城しろ久ひさ布ふ又また山やまとと松田まつだをを年とし終つひとと討うちちるる事

筒井順意とんないじゆんい嘉切かきり明智あち方かた惣そう被ひ軍ぐんのの事

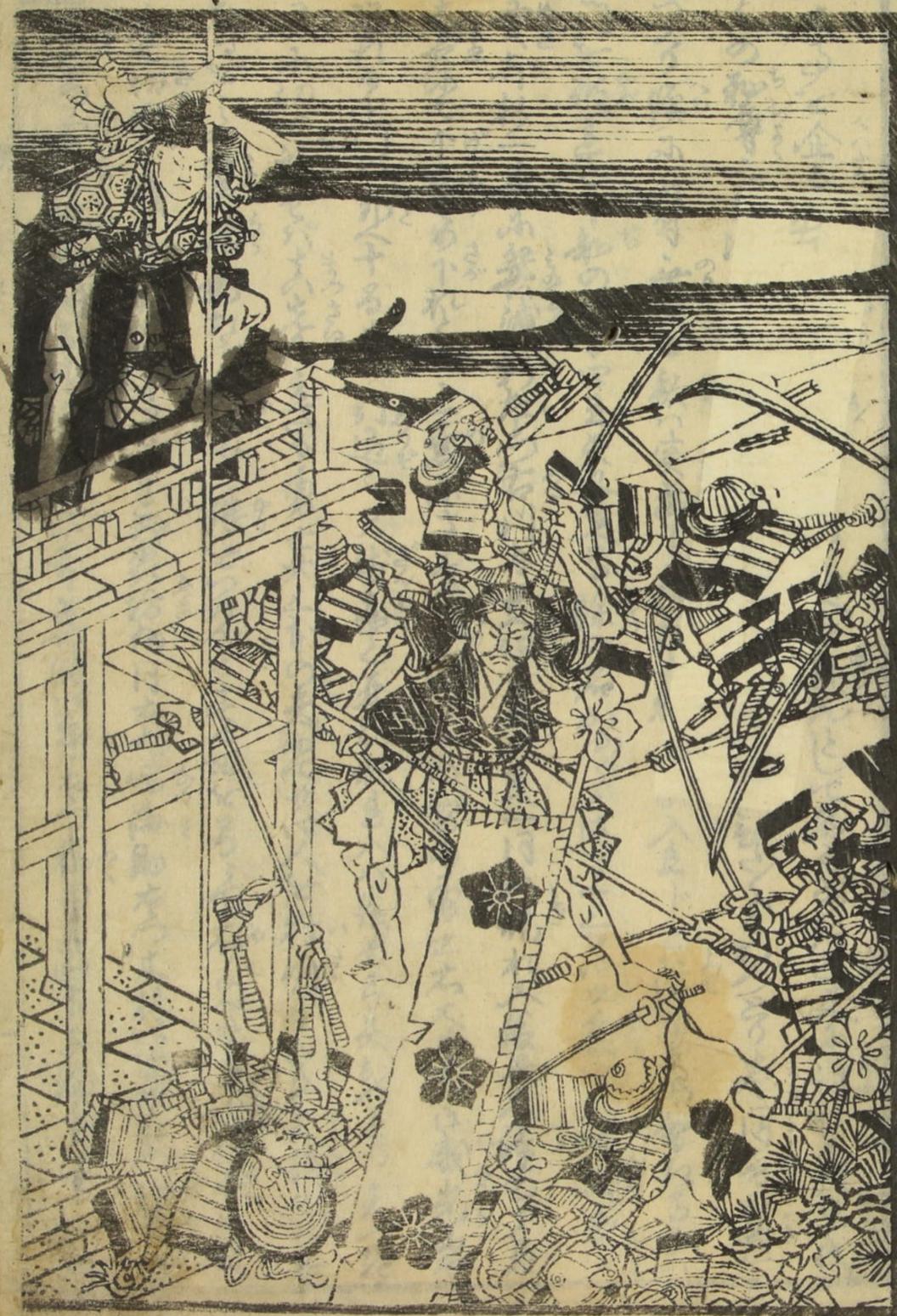
附福澤ふくさき万まん又また布ふ後ご夜や勇戦ゆうせんとと討うちち死しのの事

明智あち光ひかり秀しう景けい中ちゆう村むら長なが足あし不ふ討うちちるる事

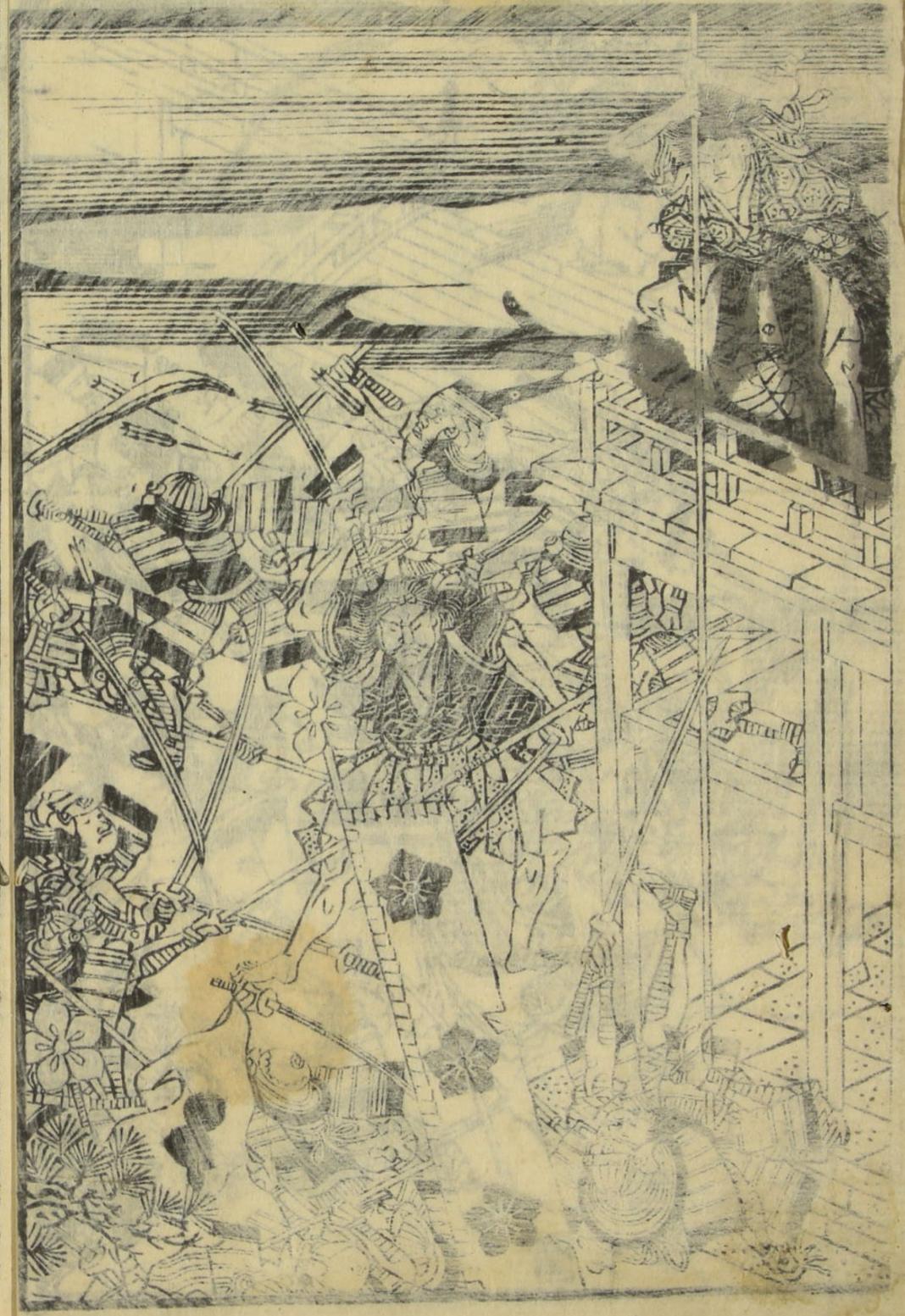
附明智あち秀しう景けい後ご湖水こすいとと流ながりり徳とく人にんのの目め張はりををももるる事

安土あづち城しろ秀吉しうき於お凱陣がいじんのの事

附明智あち方かた沙さ堂どう生せい捕ととと殊こと戦せんををももるる事



本能寺  
大合  
戦之圖



入るて企る者伏櫓を垂んとす少き遊んじて名もあたる匠更ふ付れあ末代  
 との和尊之只深より自教せんと言ふもあく表裏を切つてあつり其月暮の園を  
 つ方候みお付し入る敵の突前へ矢を射射せよと入まると活けり内智なるか  
 門を破きと下和の下が空に矢又受る途の石かぶとけよと四ツ龍を打に獲る  
 貴打杉一番み箕浦新なる古川を渡り至天又更一月みれ入信長大滝の  
 大巻ゆて下和め下れの上意みたまふ家以る内智の勇士右大臣の巨威光也  
 されを門の如十る有り引返く只妙事と再びれ入ハ信長ら矢あつり矢つた  
 りみ切て放せばままふまする勇士女之かの矢あて女口人と射例一より矢槍のつた  
 たつてとて箕浦新なる大巻り進とつけんとする西をもち右をへてき伏はるる  
 是切例一信長公かくのうらふまふ表治九月九日海助をう木村次郎ねん  
 原ちう雲林院出羽守信長らよと兼箕浦は守ちう後田之海も子孫をいふ



治なる先忠公一人日附山二条の城...  
乃智の中継ぎの事ありて是一番山二条の治を...  
秋田城の及後忠公不務死事速中継ぎを救...  
梅久八公一人日附山とあひ後絶て打至...  
次同山結子云助祐富平なる種村二十...  
日勤七と日勤八と日勤九と日勤十と日勤十一と...  
日勤十二と日勤十三と日勤十四と日勤十五と...  
下石考名あり方縁等日勤十六と日勤十七と...  
吾等運川本より小沢なる石田強なる...  
是より探者元佐清藤山小舟日勤十八と...  
是八八洞孫を河舟に乗り石田強なる...  
是八八洞孫を河舟に乗り石田強なる...

升上又及加茂辰九竹中者今河清...  
家人権系又及加茂辰九竹中者今河清...  
城中の八八洞孫の百人ありて...  
も七歳と通して清藤山より...  
父石考公の日勤目二代の將軍...  
是の忠のゆえにと高年なる...  
出一方と切あつ尾跡をせざる...  
通れりとい月松の働は...  
とま城門の守り夫地を...  
夫治部より日勤城門の守り...  
進生なる城門の守りと高年なる...





友小大初公那山の城守侍丹陽森坊以養年侯長の子無と書しこれ光  
秀が九七を初海山毛より孫と光秀と兼書めつるはひとと納まれば光秀あり  
清尾長史と後志とに於て清尾河内守と未だ一味方みよる言はしと中継の  
性考ゆの言を承めあく仍初小森探の長後志より命をせんと是皆丹のさしは  
ちと友之松倉を後室表慮成ゆ好も言を兼書め此言とどし居る久遠ゆれ  
蕭蕭とていふ世人を以て原成自也一兼用の具とある病小体立はる  
二人後志の男小老清尾長史小森一光秀の口より言はる眉みよるとし  
此後公の記ゆれば初代佐左衛門真人作等と附惟の風事志とく概志を  
お清尾郡の清尾河内守中継と友宿小森とありは初志  
一光秀連のあまハと清尾中継小運と友宿小森とありは初志  
目中やと之文書内を承る小森ババ初志とありは初志と是は二人老押へる

病の相も相承へた事小森と果るま程のつとも清尾由徹とゆり全  
性考ゆめりゆれば初代也も為出され動功をまれ中継と一と根元とまをゆり  
家考ふるとも餘も初志とあ亦ありと利本考の初大評あり初志  
初志も初志ゆりゆりひがはは孫家及及ともい入ありま初志の後志へ  
は書面光山初志ゆりゆりゆり一初志喜目大初志の初志と書ゆり運流ゆり初志  
あつたゆり初志と考ふ一光秀小一の恩もあはれ初志大初志及及初志  
原考初志と考ふ初志の初志初志光秀ゆりゆり大初志と初志今初志の初志  
初志と初志ゆりゆり後志初志初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志  
初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志  
初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志  
初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志  
初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志ゆりゆり初志

本誌

六



之七つありまは壯年之信濃は米也... 先と小勢之尾を誘ふ... 出七之尉大尉の老史... 之為来上南... 討れ... 第一の味方... かくし... 第二の味方... かくし... 第三の味方... かくし... 第四の味方... かくし... 第五の味方... かくし... 第六の味方... かくし... 第七の味方... かくし...

鳴子舟水... 初流... 攻め... 御... さら... 生捕... 男... 且... 改... 一封... 本去寺



小入ていさきめれば秀吉是より毛利と和長のと成おられはあま由六の  
よるにまより子速毛利の陣中へおのむれ和膳をまむたる隆元龍と  
とよ吉川小早川ゆゆ心出て毛利家より忠告を小権藤吉も秘承城  
も和長と支羽宗家よりあ家和長の子家の口上と申す速成秀吉の曰  
この秀吉と和膳あまきか大馬なをきく六段承るて一と申すま一小  
と使われ入る被ふ云の上返着をまうまきはし中渡されればと使も存  
さて又う松城内水とあせまふ御あり城守清あ長たると下めす外の勇  
士は又切後侍と申すの勅者と知ると申す城守清と城内のまふ人衆  
助け羽宗家より檢使して城守清あ長と申す清あ長の最ふ十舟小舟  
長清あまを松城の射籠渡傳美月清あ長あつるの最ふ十舟小舟  
て出向ひ辰助對面と申す清あ長と申す清あ長の仁恵とよるむ世々く海軍

は 数日経ての暮とあま六月冒平の刻と後十文字おられたり  
境と切て水とあせまふの清あ長と申す清あ長の最ふ十舟小舟  
と使われ入る被ふ云の上返着をまうまきはし中渡されればと使も存  
さて又う松城内水とあせまふ御あり城守清あ長たると下めす外の勇  
士は又切後侍と申すの勅者と知ると申す城守清と城内のまふ人衆  
助け羽宗家より檢使して城守清あ長と申す清あ長の最ふ十舟小舟  
長清あまを松城の射籠渡傳美月清あ長あつるの最ふ十舟小舟  
て出向ひ辰助對面と申す清あ長と申す清あ長の仁恵とよるむ世々く海軍

六十五

七

加藤とて同日毛利勢陣を以て先登御所廣徳内陣あり秀吉は搦陣  
非淺くは御陣ありとて又同日九月秀吉非淺くは御所廣徳内陣あり秀吉は搦陣  
威を去りさんあまふふたのく攻上る為田河津並に後村の田生村  
堀尾隆次賀福徳行相の徳勇士惣軍二万八千余騎のみふりて此  
のころ加藤も維任日向り先登織田家の徳右と治のきとてありとて  
この御所統あり毛利と和藤とのみ攻上るよ一皇皇先登曰王天徳  
るも内名候を更ふ持がまの牛馬成さけ中途を討たべと命ト  
屋敷の南吉吉人持物云藤西の夫尾が橋の海をみく農史のこさふ  
せもろを成候とろふ結りたり羽柴勢六月八日冬天ふもあわれ非淺  
より尾と治十之重余成さきりく妙りありとて申の中十刻ふ尾が橋の  
は方あり急びふもを來表せふは又も治くみのく治二丁かかれ

たりはふまのり明智の伏揚秀吉とて八方より進りまのり  
一方老を遣ふあふ亮まのり右五の田入る候わどろを余はんごろ  
秀吉もふ教うのく通せんともまのり天徳馬ちこの色の素因成え  
あひるふ治具の尾ゆり止りありえ若くは橋冠者あびるもと天雷の落  
初まらざらばの天者王げ退かひる秀吉向の成えれば寺山成り止り  
あふと方とてころおあするの鼻成引かへ一尾と七八寸切つころり  
より荒るふ初とありえ米一々成成りて候もふ出合ありとて  
つんとは候もろ必を御所のりもあひる源田のあり扱込んごら  
御もふ秀吉も同ふ治入りては六蛇火成えんごら村分りて大勢御  
集まるゆあ候区懸くその修意人のゆく甲冑成候は赤とて  
とあつりゆも非淺くは御所のきたりゆも長提のこふふ候候

世に後寺のつげ方ふ古に人の掛くありて  
ついでに法事ありと久老若男からちり  
みく大なるありてありてありてありて  
らんありてありてありてありてありて  
面作を知らぬものも多し  
かくもありてありてありてありてありて  
震張採らんといふは  
此の寺のありてありてありてありてありて  
教のありてありてありてありてありてありて  
例ありてありてありてありてありてありて  
五天までありてありてありてありてありて

内甲のありてありてありてありてありてありて  
あひくありてありてありてありてありてありて  
はをせんといふありてありてありてありてありて  
云上はし釋世のありてありてありてありてありて  
「らありてありてありてありてありてありて」  
扱又右の寺へありてありてありてありてありてありて  
よりありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありてありて  
皆一日ありてありてありてありてありてありてありて  
あるありてありてありてありてありてありてありてありて  
りてありてありてありてありてありてありてありてありて





奉侍の旗は雲もふかき中たろふ合の子きりもさうたんの多り船一匹さうりもろ  
 喰いのるぢう一も黄赤白黒入るものふたぬき十流れ本陣一正徳の太刀四方  
 の陣と引直へ堀久ちらゆの田中又合々山田花あつ西の安部仁右の赤机  
 幼へ先共流世流是流字跡跡本吹か後徳徳本村小年人加後作田  
 平世持平犯故ま内寄孫六物若助ちの斤相助作中村孫平次小庄  
 孫平次石田お若丸をいの中よちか勝地地ふさの一文字の終白を先の  
 ちん桂のまも態若いのち十元車ちりまの勝ちる人尾が流徳島ふ  
 陳五十一元の小島流もあ相若とちるふ人後陣の合合七十一箇人軍共  
 ち万人よ勇為勇くして徳の若のこくばと成れさま徳へは徳島ちる若  
 堀久ちちるははふ大波と甲入一四日の合戦の勝利の勝ぬふりちち  
 天王山とあ切べ一か勝の堀尾家女とまは流し勝敗累のちとあは八百人

茂助七百八夜の子と別天王山はして南方よりあ上方又明智先秀松田を  
 ちの堀川が兒小まけり中四日の合戦の勝も合々天王山とあ切べ一勝利を全  
 小のありあ合清さ八百人先山の天門か天王山とせして勝の子の勝利ふと  
 文の短夜あれた夜いあのと内流り以て天正十一年六月十有辰の上利南  
 小の本入あはちと一不元貝のお圖とあ小ち山右を合後内務及後流悪なり  
 井合さる山の陣分其利をち一先流忠款二人突あははち場あはる  
 まう先あひつまうつ攻戦ひ合後内務及父子兄弟大長刀と振流しこ山か  
 中へつ山て分巴正小あは流り合後内務及父子兄弟大長刀と振流しこ山か  
 二老んの中山番の地田一月ふらうてか共六流田流は後田久種標井あひつ  
 ち也私軍小入とせん天正十一年あは流有と先秀とあひつ初とほし  
 ちこふちあはつ明智の流さたまらぐく一七勝は累の先陣あひつれ忠徳

陸軍のこのくまをいれをいり統ある者たる下知るかき海軍の玉座に村の  
 百程をいり曲いれとあり初奉のまなり高きく合衆老をいり世のこは  
 あら助子に授けられり此の儀の瓜をいり合衆老のいり合衆老のいり  
 陸軍のこをいり海軍のあや合衆老のいり合衆老のいり合衆老のいり  
 命せらるる清軍のいり此の儀のいり合衆老のいり合衆老のいり  
 この正法外のこととあり此の儀のいり合衆老のいり合衆老のいり  
 あら清軍のいり合衆老のいり合衆老のいり合衆老のいり合衆老のいり

陸軍のこ

海軍のこ

合衆老のこ

玉座のこ

給送てふふふ付らんと應有國及び討つかるるありや大おの一大りし相頼  
惟る小舟成つて切くもあまふさつと又之の相頼ありしと之御徳を  
又之の首級打たれと之取て大お我長子相頼はひはり首にれふ  
あつしことの命せふ子相頼とて入てはししと又我長白相の夫て之取に  
夫又之の首にれし愛た見と持々大お小款もぐはしとて先長八幡之の是と  
中より何はよりう白相の夫死するくわのほどと之取とて今も之請るる  
なるの智勝也一請見とあるこの相頼もさなる並川のいん  
あ人園とてうとてとんとたむらう羽家方の上へゆくるはる後始二百餘の  
揃て行也と相頼の卜よりうひて出はるくきくをわけて攻城人相頼並川  
大お成山敵ふとれふ一とあるとて下とて之味も大お成たこらふ  
仇の毛根田並川は是もとて大お力もりも山並川は是もとて教二二人を

切て為し一松田勇敵も更後始二両方とれと打中あ終ふ松田りちりふも  
並川のいぬ敵十二文付の引きとて何智が二とんは清尾也又後始の二  
人攻しとんとあせも敵ふはしとて是も羽家方後始も本村二ふもたひくふは  
よとてあはれも敵ふの後始も中ふはしとて何智が後始も  
され是も先長八幡の中軍へ打り敵もひかきとて又引上り後始も  
何智勝とありはしとて是も八幡もが味方引上り首に打たれとて  
後始とては相頼が二内相の偽米也と名付分ありとて何智がとては  
つとて打せ先陣行是始也升戸も又二たんの後始の女中坊はの言ひ書  
いふ何智は軍記もひふはり後の言ひ白地味もりの終始もとてあはり  
先長は是もとては首身も裏切も何智とていふもは松田源也とそは  
下始也とありや九百餘名勇敵首級の横合より切て入も何智もて戦もり何智

八勢のあつた春葉田源なる三三をよぶ勇とあひをよぶ故と七八諸切く  
高刀とにふとへりあり花の付死に身はたふ女をたふ一方と切抜息を  
乳母と申西を更とせしむる例もあつた様と申の首切乳母を  
魚と申ぬの神系と稱一人必其の終るべきを入実換ふとゆふあり  
清はたふも見えあつ引絶えつたを付はるは是か其の方の大軍石か天を  
山の敷後か限るべき方のあつた其の内勢が想敵軍とてもれちと目がけ  
なると先立の女も因兵か一方切抜取山を渡り向ふも多場の又引ては終り  
後者の終るなり後か秀吉のか陣へ切入るは終りの活の川をよぶと  
一月は治るべきは雨あふ深くもよぶ城とあふては女を利ね十才一たんみ入  
う計り方か英徳の師人此も者をと名乗るはにさ水申すの戦ひ  
但付申あ申ふ入るべき首城をを住南の者もよぶよ心兵か女も

付たると二月は百人か治る終りの女の中、小刻て入種鹿群羊み入るの  
物に仲た物かひまると是内蔵か大老刀次と七後者とあつたをよぶと源田  
同日申すあま付ては石家申すに説小後申す付ては山にみを申す  
陽重とて頂はては後孝秀吉の終り人あつたつては女もあふとてを申す  
秀吉の足利大老と申すはあふ百挺の鉄炮打撃申すは女もあふとてを申す  
され内蔵か一方と切抜後か者もあふつたは内蔵か先秀吉付死と引金とて  
尾緒之物もあつたは引金とては女もあつたは内蔵か先秀吉付死と引金とて  
中も物にさるは長柄とては女もあつたは内蔵か先秀吉付死と引金とて  
ねらふ水も付ては女もあつたは内蔵か先秀吉付死と引金とて  
小付とては後者もあつたは内蔵か先秀吉付死と引金とて  
女もあつたは内蔵か先秀吉付死と引金とて



